

ドクターインタビュー

くろさか小児科・アレルギー科 院長 黒坂 文武 先生

姫路市岩瑞町で1986年に開院された「くろさか小児科アレルギー科」では、開院以来32年間地域の健康を担っています。一般小児科としてはもちろん、アレルギー疾患も専門に治療されている黒坂先生にお話を伺いました。

——先生が医師を目指されたきっかけなどお聞かせいただけますか。

医者になろうと思ったのは、父親を早くに病気で亡くしてつらかったことや、先代が江戸・明治時代に寺子屋をやりながら医者もやっていた、という話も聞いていたのでそんなところが関係しているのかなと思います。

私は生まれも育ちも姫路の播州っ子です。山口県の大学を卒業後、生まれ育った姫路に戻り、姫路赤十字病院小児科に就職しました。同病院で約2年半の研修後、東京の国立小児病院(現:国立医療生研センター)の研修を経てアレルギーの専門家として歩みはじめました。その後、アレルギーの分野で世界をリードしているイギリスで勉強する機会があり、最新治療を学んできました。当時の日本のアレルギー分野は10年遅れをとっていましたね。そして再び姫路赤十字病院で小児科医、アレルギー科医として臨床経験を積み1986年にこの場所で開院しました。姫路を最新の医療が受けられる環境にしたという想いで取り組んでいます。

——貴院の治療や特徴などお聞かせください。

一般小児科と気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギーなどのアレルギー疾患の治療を行っています。必要に応じて、スギ花粉、ダニの舌下免疫療法や食物負荷試験も行っています。

小児科の患者さんの中には、風邪、高熱、ウイルス感染症の方も来院されます。そのため診察室は8部屋あり、それぞれが独立しています。感染の可能性がある患者さんには、陰圧の(空気が漏れない)部屋に入っていたり、逆にうつはては3か月未満の赤ちゃん、免疫不全の方は陽圧(病院の外からのみ空気が入る)の部屋に案内しています。その他、徹底的に感染症対策を行っていますので、感染症の可能性のある方も安心して受診してください。

——先生が行っておられる姫路市の「アレルギー調査」について教えてくださいいただけますか？

平成7年より、毎年、新入小学生約5000人を対象に国際的な問診票(AISAAC、ATS-DLD日本版)を用いたアレルギー疾患(気管支喘息、アトピー性皮膚炎、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、スギ花粉症等)調査とともに食物アレルギーの調査を行っています。約24年間の調査結果は、とても貴重なデータだと言えます。地域限定の調査という点を差し引いても、おそらくこの国、都道府県も行っていない一番信頼性のあるデータだと思っています。開始時より現在までの調査結果では、喘息の有症率はやや減少で、アレルギー性鼻炎、アレルギー性結膜炎、スギ花粉症の有症率は増加傾向にあります。


スギ花粉症の有症率を地域的に見ていくと、山間部の夢前・香寺町では非常に高く、それに反して姫路市の中央部、南部では低い傾向にあります。有症率は花粉の飛散量の多い地域と少ない地域で相関しており、飛散量の違いによって、各地区の有症率が異なっていることがわかりました。また、スギ花粉の飛散量が平成8年より増加傾向にあり、全体的に有症率も増加しています。

食物アレルギーについては、既往率は、調査を開始した平成7年では7.7%でその後減少傾向にありましたが、平成18年より再度増加し、平成23年では8.1%となりました。具体的には、ピーナッツ、果物、野菜アレルギーが増加傾向にあり、症状としては「口の中が痒い」という方が増えています。当院では、平成4年より花粉測定を行っており、これをアレルギー検査データとの関連性について検討した結果、花粉症と関連して果物・野菜アレルギーが増加してきている可能性があると考えられます。

——アトピー性皮膚炎の調査結果についてはどうですか？

アトピー性皮膚炎の場合は1990年を境に有症率と既往率が明らかに減少しています。減少の理由が、カーペットの生産額と畳の供給量の推移と関連があるのではないかと思いましたが、ダニがアトピー性皮膚炎、喘息によくないと言われはじめてから、1990年をピークに急速に敷物の使用率が減少してきました。昔はカーペットなんて敷いていなかったですね。畳の供給もどんどん減っていて同じことが言えます。最近のマンションは和室がないことが多いですよ。畳自体も中の素材が違い、昔のように藁なんて入っていないです。アトピー性皮膚炎が減っていく推移を表すグラフと、カーペットの売上げが減少するグラフは同じようなパターンになっています。同様に喘息の有症

DOCTOR INTERVIEW



黒坂 文武 先生 プロフィール

くろさか小児科・アレルギー科 院長

【略歴】

- ・山口大学医学部卒業
- ・姫路赤十字病院小児科
- ・東京国立小児病院(現 国立生研医療研究センター)
- ・英国Royal Brompton National Heart and Lung Institute Hospital
- ・姫路赤十字病院小児科
- ・1986年 くろさか小児科・アレルギー科 開院

【所属・資格】

日本小児科学会・日本アレルギー学会・日本小児アレルギー学会・日本小児臨床アレルギー学会
日本小児科学会専門医・日本アレルギー学会専門医・日本アレルギー学会功労会員・米国アレルギー学会会員・欧州アレルギー学会会員

DOCTOR INTERVIEW

率が減らないのは、原因がダニやほこりだけでなく、ウイルスの感染症が大いに関係があるからです。ダニだけではなく、急性増悪にはウイルスが関与しています。マイコプラズマやクラジミア感染も悪化の原因とされています。

——その他にもアレルギーとの関連因子があれば教えてください。

遺伝や生活環境は関連があると思われます。遺伝についての調査によると、アトピー性皮膚炎の場合、母親または父親がアトピー性皮膚炎の場合、子どもがアトピー性皮膚炎になる確率は、両親ともそうでない場合より2.4倍高くなり、両親ともアトピー性皮膚炎の場合は、5.7倍高くなるという調査結果があります。喘息も同じように高くなる結果が出ています。しかし、これはあくまで遺伝の有意性の確率です。その後の生活環境によっても変わってきます。

生活環境で最近変化しているのは、受動喫煙と気管支喘息の関連です。まわりの大人が家の中で毎日11本以上喫煙する場合1.4倍有意となります。しかし、姫路市では毎年受動喫煙の割合が減っていて、この調子なら10数年後には0近くになるかもしれません。親が煙草を吸わなければ、子どもも吸わないことが多いですからね。

——保護者の方にメッセージをお願いします。

最近には特に乳児のアトピー性皮膚炎に関して、保湿をしっかりする、湿疹をとにかくしっかり治すことが大事だと言われています。2歳がターニングポイントで、アレルギーも増えてきてダニの陽性率も上がってくる時期です。アトピー性皮膚炎を予防することで感さが減れば、3歳時の喘息の有症率が明らかに減るというデータが出ています。また、皮膚の炎症をきれいに治せていけば、食物アレルギーも予防できるかもしれないと言われています。保湿だけで難しいならステロイド外用薬も使って、徹底的に湿疹をなくして皮膚の状態をよくしておくことが大切です。ステロイド外用薬に抵抗がある方もおられますが、副作用で困ることはほとんどありません。たっぷり薬を塗ったからといって副作用が多い訳ではないので、早く良くなるよう指導通り塗ってほしいと思います。ネットなどでいろんな情報が出回っていると思いますが、心配なことは医師に相談してください。検索するなら、学会や大学のHPを参照して正しい情報を入手してほしいと思います。

アレルギー症状があつて受診されると、検査ではダニが関連していることが多くあります。なので、ダニ対策は早くからしておいた方がいいと考えています。最近では5歳から免疫療法ができるようになったのでおすすめしています。食物アレルギーに関しても、良い治療法が広まってきているので早めに検査してみた方がいいと思います。

——先生の趣味やストレス解消法などございますか？

山が近いのでよくトレッキングに出かけます。景色があつて自然を感じながら運動できるのが楽しくいいですね。

——本日は、貴重なお話ありがとうございました。

(文責 三原 ナミ)